

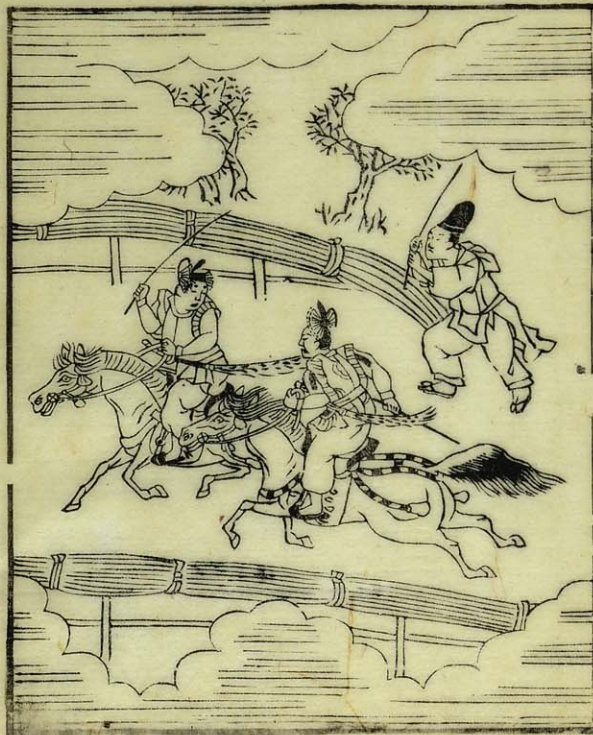
古今著聞集卷第十

馬藝 第十

神事此處より競るは先よりするは袖を
 競るは袖とを争ふのもなりは武徳有下由業
 てさぬくの了業とほくは又信原の駒と引く
 信原の察は病く礼儀よまむくはさすとは
 此より信原の正好也馬力の正好也
 西暦二年五月十八日抄政有右近の湯中く競馬
 十番河内次しより山并の天酒言儀同三司大り
 中御をゆくおりしを酒原をよめてるはおゆる未

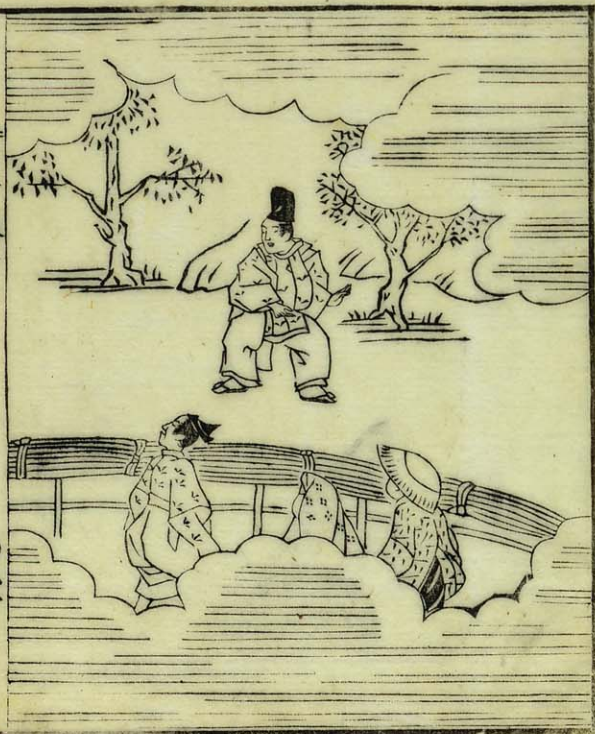
古今卷十

られたり一處に於曹尾張並附有曹同敷めつ
 かう國つりより善附を興へびくわけたりは其
 切つる半ハおろりする言わがごとつお敷の勝
 ちたり善附敷の小むらひくまけてはハ川が是
 めぞとひひよりをり人々をて系と感して
 以しを今こなんいさ競るにまけりするとの
 あくわくひを争ひと興あつるひやうあは
 寛治六年五月十七日二条大極よそくおらび
 多心了成よりて輪河をて競るお敷あり
 處上人をつりてつりする東の陣のまより也



古今卷十

〇
ス



中門よりしきいで 駈ける主上を 轍さうを 給ひさる
たふれく 御まもあづけりやうるや

い川守の 揚祿の 出御する 東三条より 西へゆくは
わがりさとの られきたるに 中門の 廊下 中へ 瓜を
付く 車寄れ 戸の せまき びく たり たり 是れ 後

らひかう ねひきや 作れくらぬ 是れ なるや

天保元年十月廿日 多田院 寛治の 例と ころの

て 高野 小由香と たり 乃の 程お 得つ ぬく ぬぬ

高野 白河院 より 分り なく 中使 たり たり 女七月 廿

中流 又 傳を せかり 仰 する 八月 小奥院 へ

古今巻十

さゆ せね とも 仰 する 昨日 還清 北より 長坂

の 系 姫 王 へ 出 せ ぬ こと 疑 する の 事 あり 二 番

た 系 姫 後 右 侍 氏 影 頼 朝 下 乃 務 二 邊 院 理 文

左 近 衛 曹 三 俊 子 存 たり して 左 衛 三 邊 院 他 事

影 頼 朝 下 乃 務 二 邊 院 影 頼 朝 下 乃 務 二 邊 院 他 事

と 承 せ たり とい 具 事 たり たり

傳 延 三 年 八月 廿 日 仁 和 寺 参 拜 の 事 傳 へ たり 日 吉 院

参 拜 の 内 々 へ 七 邊 院 参 拜 二 院 参 拜 女 院 待 賢 院

今 又 又 又 前 参 拜 内 参 拜 せ たり 参 拜 たり 左 邊 院 下

参 拜 たり 一 邊 院 乃 曹 参 拜 参 拜 参 拜 参 拜 参 拜

かりあつてこの物名のまゝうゝ和めて脚子にや似
せぬいひうぎれだ難少くうまきんはくく何であれ
だこれねゆとひるされんうせいのふゆあくま
無るともゆはまやう

後名相院此山阿の疑るに院の在敷長恭於次
善平 府生下野 教近つうう何りきるに於法家
とゆふの教と打うりまうま傷り中へ入り何り
まうりまうに 教近 揚まどり 揚負 普運 だんはく
ささるえ 程くく 教近 せめされるに 佛也の 教延
う事とひひ 知 福を 教のおまうはくくやうう

古今卷十

物なふ向ひく 勝ふもや似るるせいのうぎれをゆ
希一と河くゆく 雲も お遠してまうくやが
中うれまあの人ふうりていあつて

西暦元年の八月會中くゆまう ちや 恭三系
下世 教系 教則子 ちや せうりまうに 公系 海
まうち 教系 公系 公系 公系 公系 公系 公系 公系
てまうりて 公系 公系 公系 公系 公系 公系 公系 公系
それだ 公系 公系 公系 公系 公系 公系 公系 公系
公系 公系 公系 公系 公系 公系 公系 公系
公系 公系 公系 公系 公系 公系 公系 公系

てぞり屋ぐりより何ぐりて始まる所ありて終
て并止めてのぞくとある所せと幕下の赤は
むけくたてよりぞりある者同派やとるべきや
のやゆにそくのせ今ハさやうあてそ何やめや
の鳥をそとる所ありねとさくく下りもて勅為ゆ
されく厥別為ふおされよりは控家ぐる候も
ハ控家斗よねさく何やうまらんあつとさ物
一うけ斗もくつ控家りて必候なりとて
取らざり物候をせと束めさはんをさ發と
ゆをせくこのあま草一把も垂れさしくや

古今卷十

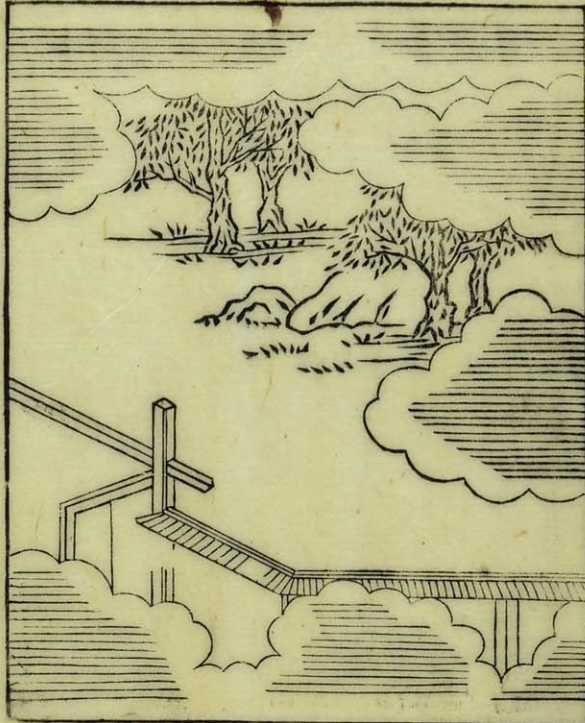
くらせくそまをる幕下富士川あひさくの初り
始る金ぎの付ハ控家ハ七八はま替垂てと櫻むさ
ひく人多つけとら教してゆをねと控家ぐるの
虎ふもをひてりよりえと控家してのつれと
おまハ百ふとくひとぞまうれと控家ぐる候も
ふるものやと控家ハひさくへ海して死なれ
ハ初るものやと口初とさくへ
一條二位の合方れりせらる幕下の種とゆまきり
泰然久とてそとれらるをゆよとありとて
そとやとされらる所又製れが七中を録よとて

そは思ふくわろくはうろまつち物くを教料はくを
とぞやきり紙を後よいくとらひあがうゆふの唐に
やのそれまきりきれな海がてきくくわと落さるきり
人々目紙たごちうしきり

建仁三年十二月廿日そのの中そのト好そのトをわたり申すまきり懸いそ平
あまきそりいふあめよた唐のち申あき奈久信有そのの
大和たののち申す下の好の教の文のつうりせられけきり久信のを
上のの教の文ののの徳ののの考のをのれの久信の命のをのり
ひて解のしのをのねのねのりのきのれのがの地のわのくの是の
あがうはがぶるたたわたりきりにきてと申すふ

古今卷十

唐の仔細おをわらね中のをさけうゆふせきひりり
て久信のの宿の和のまの知の立ののの經の小の信のまの入の事のの
やうきりまきりいひをれ先の結のまののの常の鹿のハの目のはの林
小物の志のとのして法の師のをのうのわのとのねの事のやのくの下の人の代
使の入のりのきのりの信のわの風のちの小のののいのれのとの久信のまの章の
きり久信の中のうのそのあのうの考のとのあのひのくのわのひのくのをの
外の信の分のののあのうの過のわののの新ののの多の小のびの信のりのて
雲の成の此の非の人のとの信のしのての信の事のまのうのとのあのうの
繼のとのりのての信の負ののの件のをの減のまのとのりの信ののの信の其の
つら小のやうとあれば信の右の思生此信負其



古今卷十

〇又上



あがげまへよりきり墨文書とびくわげてあよりき
里々人々只けし極二層なまよりきりこり
歎感ありきるとそくやれ時おまのせしとけし
ハハハの記しおれつらん地々々向の樹ありや
傍ありとも一ありとそ防のの烟云をなを巻きて
ゆるる時建曆の由撰乃香小一たといきふのりて
依りせられ方きり二条宝明よて池の由撰の
おれ傍風よ吹わげきりこりたにたあそそ後
おのあよりりく走るる河川あろろろろろ
る河まてきりそめろろ河ま切ふきり河
る

り 籠とめははつめさそえ籠よりりやく他とて
おゆえのらそけとそ河うたて二条鳥丸ける後お
れおあくとあそ秋みきりるる若国治をそり
たりそ後おゆくりまきり人あそいそ死書とまげ
きりきりまてと中後まをそりるるりあそ
若く多き傍りそくはしむとそ中もははた烟云
交脚くおゆは同じふそちく麻よけし地きり
小麻江川よ入されるもつとそへよきり
りまのそ見そりきれが上下おろそわさしわ
つりきりねよおりそそ物具あそりれうそ公

しうきりも後もさうあくとまはたよりせんもはれはるよ
てのとれねむさくわたりあはれの程目をさあきり
くもくれ男さやわうてあうさはれあんかきさうり
さるばるのれをうく二ふひさるあせりせもさうきりく
秘事よせんやあつりさる

建保六年新日吉の小五月もふ新流は数書奉納奉
府生同武遣つてう海川とさるれおきややく傷よせよ
さる傷来あて落く死くうさるけふ承もさうて又おれ
が山後を中んとさるれさまはの死あせ傷てゆく者さうり
たればお武うゆくまうとくいひうさるれ又下人さう
て出いさせ捨てトが山冠のひんまへえまあせはれと
ぬとあさうりされハおのまうう鳥帽子そりさうり
まうりきれん別下人が鳥帽子と川いさそあわけく
うりさるのむさうりさうり

古今卷十

桐葉流カ 廿五

お撲ハ元々は成の丸或ハ衣皆流カれはれ
よもいふぬあれたお意ゆあるも昔ハ八極流
まはれりれはれは流カれりのとるめされ
寛元うり心算流とそ流のこま目利さうり

延治六年閏七月六日中の本陣に兵、童お撲乃
事迄せり亦あともく舞と奏とせたる様冷然と
観る様次より朝信の調遣未と奏しきりその世
傳へ心腹部下衆へ或は親王傳多の事舞終
て朝信実敵と成信傳しきり此より後五郎丸を
奏しと成り親王小徳以わりきり也

相撲中平儀同之目の内中へあがりきり時弘へ
その内津家^{さかひん}の味^{あじ}の味方へあがりきり味作^{あじ}よ
らりて時弘^{ときひろ}あがり小次郎^{せうじろう}をこへりしころの
あがり時弘が首^{くび}を切りせん中平儀へ又中平儀

古今卷十

首^{くび}はさうらん中^{ちゆう}を^を中平儀^{ちゆうへい}あがりし固禱^{こくだい}せ
しりて別まもれた時弘はくさむはく地よればあ
せりせりて時弘あがりいさむせりきり味作^{あじ}よ
さくあがりせん津家^{つげ}はくあがりし中平
儀^{ちゆうへい}を^をせん中平儀^{ちゆうへい}はくあがりて門
の宴^{うま}の本陣^{ほんじん}おたり

あがり時^{とき}親光^{おんだう}はく備^ひあ守^{まも}りきり中平儀^{ちゆうへい}はくあ
がり小次郎^{せうじろう}はくあがりし柳^{やなぎ}中平^{ちゆうへい}儀^ぎはくあ
がりあがりし中平儀^{ちゆうへい}はくあがりし中平儀^{ちゆうへい}はくあ
がり中平儀^{ちゆうへい}はくあがりし中平儀^{ちゆうへい}はくあ
がりの中^{ちゆう}お撲^うの事^{こと}はく勝^{かち}思^しく重^{ちゆう}儀^ぎと合^あり

とらに重層の鹿と申すもせきり紙幣せみく
只と小太事知さぬとのひきりに果て重層ま
とよそへ脂思ふかりせれど脂思まらむびせきり小
船家右府らうまきくお存よきり厚力とて人
頭らうりせられらる程は泰無耐く冠も打た
されりきり

今年たのお撲多く負多り派有府わざきり油
うとせきりたの方より船の方へ脂思負つては
と形似せさゆられ小きりは脂思考ふ小むひら
多に脂思と火候なまなげ付たりきり後のは

古今ア卷十

〇十一

揚負とて姿せと保常耐ゆやく奇異の事とや
斗のお撲おもとやて揚負せさゆりのみまこやと
まて世の人推とるこのゆきりともやびりは後一系
此の山耐の事とやお撲のきり久光とよお撲
れと那ぐおりく歌とくさきりは常世小令れ
うりきり小常世と毒度部おんのれとくれて後久光
以とつめてせあうりきり久光岡地おんきりおれ
て今より後いねゆつくせとぞこのひきりま後
て進付さりきりたおおきり小をせ、揚負
とまらうりきりおれたれたを付さりきり

禁城ハ命うまふハ者世ふをけしハ命あつて
うへとぞりあつ

西暦二年八月三日遊只而の飛ぶうへはひてする
陽夜中にお探りまじとゆはるをり今人及旁ハ
野井基綱のト下志方の中にお通れ下
と定まききり南の小路よ出陣まきり程は院
より子細とせられてうへりみきりまきり
漸くゆきの南におしん家くよまきり程は院
あつても

古今卷十

尾張守に任人おるぬの持まわつりける時多に
又候して侍るるあつたぬの主人の意徳を
し内裏よりしりき候も小御きりあつた
きり内裏より車ひりまきり候まけまのふ
我合人あやまらせたりふり候も人候ま
まの御控へ身おも奉らせ候も人候ま
ま、西の川のまきり候も是候まきり候も
いふ候もな候まきり候もまきり候も
いひ候もあつた候もまきり候も
めたり候もあつた候も

と涙を帯のてくくすやせり膳にたれをわ
りりわんとしてはゆのにかゝぬハカとまじゆるハ
なぐては涙擦し七姉ふたりを付おらぬまより
てこれごとひつせとせぬハ擦りぬ物とといひ
て通り小きりるの是れせんまる程小つくりあつり
る成事たせぐありきゆつとこれやぐおそ病
しととり

佐伯氏長とト先てお襟の首りめされと越あれ
ありのかりきるとれをねおる橋那石橋とるぬ
きろ小きりげぬ女の川のあぬとそとけりといて

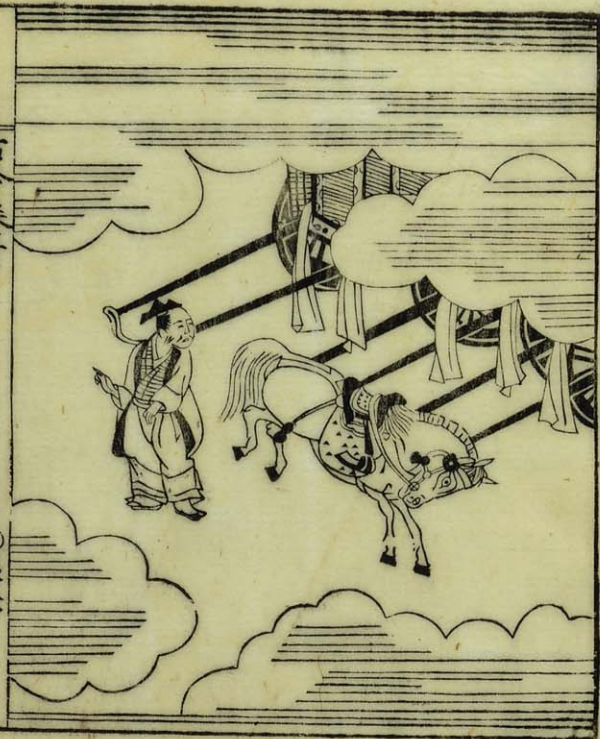
古今卷十

とてけ女まきり氏おととるれやとてた
打とつとつせせりきればるよりありて女補ぞ
つるおひおれりもよぬと一なりよりきろ小女と
知くまるとりてとわれとぬやゆさもぬくりき
まひいとわりやくとさくくひをせけしやより
りまら付桶とぞとけりて氏おととる服よとて
てかり氏お真ありておあねよやくるおれとい
くおといまともねとざりより川ぬんととれど
いといつとくまるとそおも川とぬくもあけ
バカぬらばりておあくと女の初よとてかひく



古今卷十

〇又七



り申すは入ぬお打とて後日成らるゝて打發て
き御中にもいぬ人よそくハ志多入御ぞ申いふ
さ事くつらぬさしてふえぐて是きり我の越
あまのりのくお積のまほしくお事なそ力つた
と申よりめさ御中よ入と事とてかてあま
て女あつてあお事さ事申とそ御されま誠ハ
されぬ世ふとされらんたかもゆるん御方もい
このひぢり申くハあされれんやのちよみま
さ事よハあべく思系とそじつともさ御
は是の御日と御らあつた事ふ三七日還
一

古今卷十

あまに御ふらとさううひまんとてく日殺もま
きりらるゝかじとそいくくのそ御かまたいす
あまのひくそ御りふきりそ来よりあまを殺
くしてらをさう女に御らる御とあさうて
おまもこのそ事さうり娘の七日ハはたてえ
とさうりき御う涙の七日よりハサうく
才三七日よりそうううハハひを御うく三七日
くこのりり御りなひく今ハその御り
ハさうりそえ申とそあまを殺し
めつらう御ら事なり御のそ事御のお
お打さ御

のがれ多しよきり云々然く申せり云々千人といふも
さき入りのあつりあづかば今よりほむわが御事
かせさ務給ひそし申されて申すも兼説せさ務給
たりそれより申給ふゆかりせり云々ハカカアてん
かき申納を信実にお撲競るまは好て申言え
と成ててまざりせり成父の申すも停通まつよは
ぬ一給々れもれ云ひまざりせり申お撲を以て
とよりあつりまざり給の腹へら成入るゆかり
く申納を云々まればまふよりて腹へらまて
ひき給件のお撲と云のび成るれめいまての

申納にお撲と云のび好じがあつり云々いふまう
なるせらるるバ儀成まて一まうべのなくあつり云々
ぞく作合をまあきり別申納をまはがお撲好ひ
いひ後へらまてついで御負と改直し後へら
これ制止せらるるゆまらるる儀云々ん小と云てハ永
ひり作止まて一との給ひなれが申納を悪れを述
てかあつりてありせり云行よ後へらまて云々
されく申すてあつりせり云行よ申納をハ後く
いふり好ましに力成ぬるまなれん後へらまて
どうも及申納を後へらまて云行よとありてあつり

ひつれりなれぬとされぬ事よ是くもやがてらば
ふゆわれなかりやと無き後下置六ちてん
よりのも後中絶すお撲割じの河法なりなり

鎌倉お突ぬあよ東八ヶ敷ららとたりきり大力の
お撲おあしてして云尚耐も長小の回ひまも人
是より久留山彦司以帝中をいゆらりそれえ
もおあらるもやまらひいそらひまもそらりゆん
や、例もいもかべひひたり大おあゆゆきしゆ持あ
あうおあひしゆおあしき急おああなり白あ午よ
首よりぬきあらるもあそそまなりきり備も大長小長

古今巻十

あとおくあらるもゆ中絶よゆく唐よはゆや、唐より
々日大おあらるもそれつくとまをれたかこゆりてゆ
きり極おあつて採両重の事れゆアおさんよあ
ましく不祥あそゆんごらんよまひまいあらるも
小唐ゆんあまびびごしてまひまらひらりし路りせ
なれんま急ごらくらりわがくそらりとゆりてゆあ
きりゆまごびくふおあり耐まあらし唐をゆりて
君のゆ大事ゆらあらゆいそらるも網とらるる
ひひよりせんだ大おあ無しゆくもあまよああ
ゆぞもあまもあまらしてあまらるも一と東八ヶ敷

どうにまゐるゝおろ

を此道にゆくは河は金といふは母をまきりてそのさ
れ若こざるは解の素もては流すゝざるは件のは解
又わぬ若よつて川にわかうひさるは金りれば
申さうべあひさりあや夜合有まうき解は法解
解心ちてまいのわう小は事とてそんを海に
とさゆりまうはははハ勝つうもまいてわり
あがハまらあれくあひくも何とてまのひまれば
たもまわつてハは解あが人あわづりして人ては
らあわりの解あうて海あのみんをわして神て記

古今卷十

ふまにわあうまうまんとてまあまあまああり
まれを流すわは流あまて流あんとまきりて解は河ぬ
法解はまて中流入くまうは息斗わうひさるま吹
まてして一耐斗ままういさわがう小きりわうきり解は
そ流あまの武士たまあて系上まていさの川り日
たう常一まうまあは川入くひ中まきりて
件の禪まうまのままあまあまあまあまあまあ
まひさる人あまてあまて川らあまあまあまあまあ
川らあまてまうまきりては推あまあまあまあ
おらうままきりてまあてたうまあまあまあまあ

まかにあはれん心そのこゝろ總のまゝとむしきくまも
たりあはれれくひとづてやましくやどゆり小ざり
人々目伏おぼるる心やむさうにまあしとあはれ
くへく是之びとにげまれきりそれより小令たれ
あまえまて人あぢありきるえけりくひかきり
どばいりぬる男といふは又六人あてりえあて
ぞ月極一きるあつ耐はは汝なり其れみかゆひに
ろとろせきり又強とどにそせきりゆびとろれ
カクれど一激よあひまはかりきり

もつ相成の代お様の前の後陣中相成も空に代中へ

古今卷十

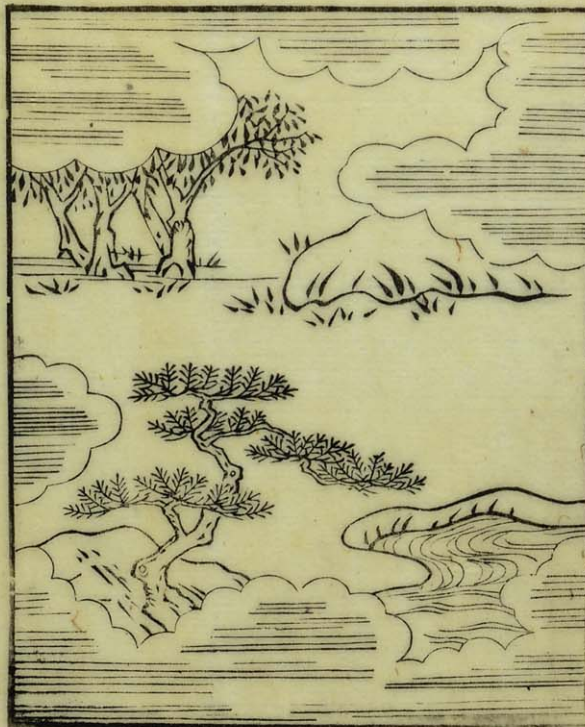
〇三十四

小慈持守海をとゆありお様息男海成と海成
て月よりころころさき方へかへく酒をどまら
よ弘光そのよまき又身なり同ドくはくろく
うたぐよなる弘光酒探めあつ汝おれあゆり小
のねよ向ひくしを代のお様へせのやどこに
ハたあがりわてとを流りその日たあをゆり
あつむうの雌雄とまけりて並發あつたつに
累進とまつりまけりくバ信守日汝あま世の人
そ汝ゆりそを代へいそめ世あをゆるそ
中候をおく最なりてそはひくよ信成がみ

中ノ不肖の多と度まてし君弟此御てゆるけれ
 御よりま御くののれがてし但らとのみんしおぬ弘
 光初てまてきむ乃理のまをて戸井てん始り
 せんハ又まのまてのま成りておひま
 作成ハ神成く死わらせくつとゆりてた又た新
 ま成りてひま乃派又弘光をふやうふてて
 中へひくひひなれ弘光がひまおのたのま
 伴成が君のまててととてむり弘光川
 とどゆりてとくまれはてし始りてま
 かりてゆりて君のま成りてわたりて

古今卷十

とるれまあてとらむけおまをの
 むとて伴をまわれがもれりて弘光を
 ハまのまては作せ御成りまよ御ま
 け一住下とまのま成りて
 神成りてはつとゆりたてくわん
 わをま成りておまを
 うとゆりておま成りては
 してゆりておま成りては
 きのこまわくまておま成りては
 り形新板群勇力執人鬼ま



古今卷十ノ

〇又五



